

サファリ^{がくえん}学園へようこそ!

ケモ耳^{みみおうじ}王子とドキドキ^{がくえんせいかつ}学園生活

しゅみや
朱宮あめ・作

すざく・絵



アルファポリスきずな文庫

プロローグ

わたしがサファリ学園の特待生!?

第一章 いざ獣人国へ!

第二章 サファリ寮

第三章 個性豊かなガーディアンたち

第四章 アラーム係は危険がいっぱい!?

第五章 ドキドキの入学式

第六章 獣人のクラスメイトたち

第七章 はじめての友だち

第八章 ふわふわ夢見るお菓子パーティー!

6

10

20

41

50

62

74

80

93

102

第九章 風邪引いちゃった!

第十章 ガーディアンランキング

第十一章 コハクくんのパスポートが失くなっちゃった!?

第十二章 孤独なハイエナ

第十三章 ガーディアン資格、剥奪!?

第十四章 いよいよガーディアン再選抜試験

第十五章 元ガーディアン

第十六章 ナナセ先輩の過去

第十七章 新たな事件発生!?

第十八章 エピローグ

111

129

140

152

168

181

197

210

230

246

Nanase



ナナセ

オオカミの獣人の男の子。ガーディアン
のひとりだが、無口
で単独行動が好き。



リオ

サーバルキャッ
トの獣人の女の
子。メイのクラ
スメイトで、お
菓子が大好き。

Rio

アサヒ



ユキヒョウの獣人の
男の子。ガーディ
アンのひとりで、いっ
つもクールで冷静。

Asahi



Rei

チーターの獣人の
男の子。ガーディ
アンのひとりで、明
るく社交的な性格。

レイ

特待生としてサファ
リ学園に入学した中
学一年生。内気だけ
ど、自分の考えはしっ
かり持った女の子。

弓屋メイ

Mei



コハク

ライオンの獣人の男
の子。学年一位の優
等生で、特待生を守
るガーディアンとし
てメイを気にかける。

Kohaku

マオ

ハイエナの獣人の
男の子。ガーディ
アンのひとりで、甘
え上手な弟キャラ。

Mao

登場人物紹介

プロローグ

こんにちは！

わたし、弓屋メイ。この春から中学一年生になる十二歳だよ。

好きなことは、推し活！それから、かわいい動物と触れ合うこと！

苦手なことは、じぶんの意見を言うことや目立つことかな……

人前で話すの、緊張するからあんまり得意じゃないんだ。

でも、四月からは中学生になるんだし、いつまでも苦手をそのままにするのはよくないかなあ。

なんて、ぼんやり思っていた朝のこと。

——ピンポーン。

わたしのごくごくふつうの日常は、この、突然のインターホンの音と同時に幕を下ろ

した。

お母さんが、パタパタとスリッパを鳴らして玄関へと向かう。

「はい、どちらさまですか……つて、あら？」

玄関の扉が開く音がした直後、お母さんがおどろいたような声を上げた。

「あなたもしかして、獣人さん!？」

え!？」

「獣人」という言葉に、わたしは思わず反応する。

気になってこっそり玄関をのぞいてみると、輝くような金色の髪をした女の子が立っていた。ブロンドっていうのかな。すごくきれいな髪で、うっとりしちゃう。

それに、きりつとした目元に、透きとおるようなエメラルドグリーンの瞳も。

だけど、なにより目立つのは女性の耳だ。

髪の色と同じ金色の耳が、頭からひよこつと顔を出している。

わたしたち人間の耳とはちがう、大きな耳。

まるで、動物みたい。

それに、腰にはふわふわのしっぽもついていた。

すごい……本物の獣人さんだ！

「獣人」というのは、日本にほんの数千人ぐらいいしかない獣人国出身の人たちのこと。獣人さんたちはみんな能力が高いから、日本ではエリートって呼ばれてる。

おまけに顔も整っているものだから、わたしたちにとつてはすごく憧れの存在なの。

じつは、わたしが推しているアイドルグループにも獣人の女の子が所属していて、だからわたしも獣人さんが大好きなんだよ！

でも、獣人さんがどうしてわたしの家に？

異色の訪問者にそわそわしていると、獣人さんがこつそり玄関をのぞいていたわたしに気づき、にこりと微笑んだ。

目が合い、わたしは思わずびくつと肩を揺らす。

「はじめまして。あなたが弓屋メイさんですね？」

「は、はい！」

わたしは慌てて獣人さんの前に出て、頭を下げた。

「はじめまして！ 弓屋メイです」

「わたしは、サファリ学園事務局の月島レイコと申します。今日は、メイさんに話があつ

て来たんです」

「えっ！ わたしにですか？」

獣人さん——レイコさんはやさしい表情で「ええ」とうなずくと、『サファリ学園入学生案内』と書かれた封筒と、自身の名刺を差し出した。そして——

「メイさん。よかつたら、サファリ学園中等部に入学しませんか？」
と、言った。

「え……？」

戸惑いながらなかに入っている書類を見る。

そこには、こう書かれていた。

——サファリ学園中等部『特待生』入試合格のお知らせ——
サファリ学園……つて。

「えええっ!」

わたしは、今日いちばんの大声を上げた。



第一章 わたしがサファリ学園の特待生!?

レイコさんの話を詳しく聞くことになり、お母さんは彼女を家のなかへと通した。

お父さん、お母さんと並んで、レイコさんとリビングのテーブルに向かい合うようにして座ると、レイコさんはまず、サファリ学園についての説明をはじめた。

「獣人国にあるサファリ学園は、主に獣人が日本に来るための資格や基礎知識を得るための全寮制の学園です」

「し、資格に、基礎知識?」

きよんとしていると、「想像してみてください」と、レイコさんが穏やかな笑みを浮かべる。

「たとえば、海外旅行に行くときって、まず行く場所のことを調べませんか? どんな国で、どんなヒトたちが住んでいるのか。そして、その国に入るために必要なパスポートの手続きも」

「たしかに……」

わたしは、去年お母さんとお父さんで行った海外旅行のことを思い出す。

行ったのはオーストラリアだったけれど、そのときはレイコさんの言うとおり、出発前にオーストラリアのことをお母さんとたくさん調べた。

どんな人や動物が住んでいるのか。

それから気候。雨が多いのか、暑いのか寒いのか。

それに、出入国のためのパスポートも取った。

なるほど!

ちよつとだけ分かったかも。

「つまりサファリ学園は、獣人さんが日本に来るために人間のことを学んで、パスポートを取る場所ってことですか?」

たずねると、レイコさんがこくりとうなずく。

「そのとおりです。さすが、メイさん。のみこみが早いですね」

獣人のレイコさんに褒められて、ちよつとうれしくなる。

すると、それまで黙ってレイコさんの話を聞いていたお父さんが口を開いた。

「ですが、人間を知るための学園に、なぜうちの娘か？」

お父さんの言うとおりで。

そもそも人間であるわたしが、人間について学ぶための学園に行く意味はあまりない気がする。

すると、レイコさんが言った。

「メイさんには、いわゆるモデルとして入学していただきたいんです」

「モデル？」

わたしは、きらびやかなランウェイを歩くスタイルのいい女の子を想像する。

でもたぶん、レイコさんの言っているモデルっていうのはそうじゃない気がする。

なら、なに？

「サファリ学園では、ニンゲンと共存生活を送る練習のため、各学年に一名、日本からニンゲンの生徒を迎えるんです。獣人国には、ニンゲンはいませんからね」

「それってつまり、わたしは『人間のモデル』ってこと？」

「そのとおりです。メイさんには、サファリ学園中等部一年生の、ニンゲンのモデルになつていただきたいんです」

レイコさんがパンフレットを見せてくれる。

ページをめくると、そこにはサファリ学園の校内図や寮の写真が載っていた。

わっ！

大きくてきれいな校門に、豪華な校舎。

寮はカラフルで、まるでお菓子のお城みたい——

パンフレットのなかには、おとぎ話みたいな世界が広がっていた。

わたしがここに通えるの？

そう考えると、ドキンと胸がときめいた。

「ちなみに、メイさんは『特待生』として入学することになりますので、学園での勉強や寮生活でかかる費用はすべて免除になります」

「えっ！ 免除って……全部タダってこと!？」

「はい」

こんなお城みたいな学園に、タダで通うことができるなんて。

「メイ、すごいじゃない！ こんな素敵な学園の特待生に選ばれるだなんて！」

お母さんがうれしそうに言う。

「う、うん」

たしかにお母さんの言うとおりの夢のようなお話だけど……

でも、本当にわたしが行っているのかな？

どうしたって自信をなくしちゃう。

だってわたしは……一度失敗しているから。

じつはわたし、今年中学受験にチャレンジしたんだ。

合格するために、塾に通ったり、面接の練習をしたり、すごくすごくがんばった。

……だけど、結果は不合格だった。

かつて見た『不合格』の三文字が頭をよぎって、あのとき感じた悔しさとやるせなさが

押し寄せてくる。

わたしはうつむき、ぎゅつと奥歯を噛み締めた。

やっぱり、わたしには無理だよ。

自信がなくなりかけたとき、お父さんがわたしに向かつて、とてもやさしい声で言った。

「よかったなあ、メイ」

「え？」

わたしは顔を上げる。

お父さんは声と同じ、とつてもやさしい表情で、わたしを見ていた。

「きつと、メイの変わりたいっていう強い思いが神さまに伝わったんだよ」

お父さんの言葉にハツとした。

わたしは、中学受験に挑戦すると決めたときのことを思い出す。

そうだ。わたしは……ずつと、変わりたかった。

『わたしなんか』っていう口癖を終わりにしたかったんだ。

今回、一度は逃してしまったそのチャンスを、神さまがもう一度与えてくれたのだとしたら。

親元を離れて、獣人国の学園で生活することは、ちよつぱり不安もある。

……けれど。

わたしはまっすぐにふたりを見つめた。

「……わたし、サファリ学園に入学したい！」

お父さんとお母さんは一度顔を見合わせてから、「もちろんだ」と、それはうれしそうにうなずいた。

知らない世界。

知らない学園。

知らない獣人のお友だち。

ひとりで飛びこむのは、ちよつとだけ怖い。

でも——胸のドキドキの正体はきつと、不安だけじゃないはず。

そう信じて、わたしは新たな一步を踏み出すことに決めたんだ。

『サファリ学園に行く！』

そう決めたあとは、獣人国への入国の手続きやら入学の準備やらであつというまに日々が過ぎていった。

獣人国に行くことは、人間にとつてそう簡単なことじゃないみたい。

それはそうだね。だって、人間が獣人国に行くなんて話、聞いたことないもん。

そんなこんなで、四月一日。

今日は、待ちに待ったサファリ寮の入寮日当日！

学園生活がはじまるのはまだ少し先だけど、寮での生活に慣れるため、わたしは入学式より一週間ほど早く獣人国に行くことになったんだ。

わたしはドキドキしながら、サファリ学園の制服に袖を通す。

ベージュのブレザーの胸元にはライオンのマークの刺しゅうがほどこされていて、まさに獣人国の制服って感じ。

スカートは茶色と赤のチェック柄で、淡いピンク色のシャツと合わせると、まるでストロベリーチョコ味のスイーツみたいでおいしそう。

この制服を着るのは採寸をしたとき以来だけど、やつぱりすごくかわいい……！

「ど、どうかな？」

気恥ずかしさを感じつつ、わたしはお母さんとお父さんに制服姿を披露する。制服姿のわたしを見たお母さんは、とつてもうれしそうに顔で褒めてくれた。

「うんうん！ すごく似合ってるわよ！」

「あんなに小さかったメイがもう中学生だなんて、早いもんだなあ」



お父さんなんて、涙ぐんでいる。

「ちよつと、大袈裟だよ」

わたしはちよつと照れ笑い。

でも、ふたりとも本当に喜んでくれて安心した。

家を出ると決まってきたからのお母さんとお父さんは、たまにさびしそうな顔をしていたから、ちよつと気になっていたんだよね。

でも、元気になったみたいでよかった。

支度を終え、キャリーケースを持って玄関を出る。

獣人国にあるサファリ学園へは、特別なバスが出ているらしい。

でも、そのバス停のある場所は秘密で、家族にも教えちゃいけないんだって。

だから、ふたりにお見送りしてもらえるのはここまでなんだ。

靴を履くと、わたしはお母さんとお父さんに向き直る。

「忘れ物はない？」

「うん。大丈夫」

「帰ってきたくなったら、いつでも帰ってきていいんだからね！」

「ありがとう」

「元気でやるんだぞ！ メイ」

「うん！ お父さん、お母さん。それじゃあ、行ってきます！」

玄関の扉を開け、一歩踏み出したとき……わたしの胸にはわくわくとドキドキが、まるで芽吹いたばかりの花の芽のようにぽこんと顔を出していた。

ここから、わたしの春がはじまるんだ！

第二章 いざ獣人国へ！

指定されたバス停に行くと、サファリ学園行きのバスはすぐにやって来た。

カワウソみたいな小さくて丸い耳を持つ運転手さんにキャリーケースを預けて、わたしはバスに乗り込む。

「それじゃ、さっそく発車するよ」

どうやら乗客はわたししかないみたいで、バスはすぐに発車した。

わたしが座つたのは、まんなかより少し後方の座席。

ふかふかだし座り心地は最高なんだけど、ちよつとだけ落ち着かない。

だって、バスにひとりで乗ることってあまりないから、なんだか、非日常って感じがする。

バスは、わたしが住んでいた街を抜けると、見知らぬ森のなかへと滑り込んでいく。道路の両脇に立っているのは、ビターチョコとホワイトチョコが混ざったような白と茶色の

マール模様の木。

不思議な模様……なんていう名前の木なんだろう？

車窓の向こうの景色を見ながらぼんやりと考えていると、カワウソの運転手さんが話しかけてきた。

「これは、チョコレートツリーっていう木なんだよ」

「えっ！ チョコレート？」

わたしは反射的に運転席へ目を向ける。

この木、本当にチョコレートっていう名前だったんだ！

それにしても、運転手さんは、どうしてわたしの考えてることが分かったんだろう？

「木を見て、不思議そうな顔をしているのがミラーから見えたものでね」

またしても、運転手さんはわたしの心を読んだかのように言った。

「すごい洞察力……！」

さすが、日本にいる獣人さんだ。

「この木はね、獣人国と日本の境にしか生えてないのもめずらしい木なんだよ」

「へえ……そうなんですね」

「これから獸人国に行ったら、きつともつとわくわくする出会いが待っているね」

「はい！」

ミラー越しに運転手さんを見る。

運転手さんはにっこりと笑っていた。

つられるように、わたしの頬も緩んでいく。

そのまま運転手さんと話していたら、いつのまにか緊張は解けていた。

それからもごとんと話していら、揺れるバスに乗り続けて、しばらく。

真上にあつた太陽が、西の方にほんの少しだけ傾いた頃、車内にアナウンスが流れた。

『間もなく、サファリ学園中等部前。サファリ学園中等部前——』

着いた！

バスがブレーキをきかせた瞬間、胸が弾みだす。

「それじゃ、いつてらつしやい！」

運転手さんが笑顔で見送ってくれる。

わたしは、運転手さんにお礼を言つてバスを降りた。

バス停のすぐ目の前には、まるでおとぎ話に出てくるような大きな門があつた。

パンフレットで見た、学園の門だ。

門の先は白い石のタイルがどこまでも続いていて、そのさらに先に、空をまつすぐに指

すお城みたいな大きな校舎が見える。

写真では見ていたけど、すごく大きな学園！

校舎の迫力に圧倒されて、ハツと我に返る。

そんなことより……

私は、きよろきよろと周囲を見る。

レイコさんの話だと、入寮日当日は同じ寮の子が迎えに来てくれるってことだったけ

れど、門の周囲にはだれもない。

まだ到着してないのかな？

ちよつとこのあたりで待ったほうがいいかもしれない。

そう判断をしてしばらく待つてみたけれど、お迎えの子が現れる気配は一向にない。

仕方なく、わたしはひとりで寮に向かうことにした。

「ええと、あそこがきつと校舎だから、寮は……」

地図を片手に寮を目指す。

……けれど。

しばらく歩いていると、周囲の景色に不安になって足を止めた。

「あれ？ おかしいな……」

ここ、どこだろう？

どうやら、迷ってしまつたみたい。もう一度地図を見る。

「も、もしかして、こつちかも？」

首をかしげながらしばらく歩き続けてみると、ようやくひらけた場所に出た。

きれいな広場だ。

まんなかには、大きな噴水がある。夕日を取り込んだ水しぶきが、銀色から淡いオレン
ジ色に色を変えながら、きらきらとふりそそいでいる。

わたしはとりあえず足を止めて、噴水のふちに腰を下ろした。

握りしめていた地図を広げて、現在地を確認する。

「今はここだから、ここから寮に行くにはえつと……」

地図の上を指でなぞつたそのとき。

——ガサガサッ！

突然、近くの草むらから音がした。

「！」

心臓がドキンと大きくはね上がる。

な、なんだろう。茂みの向こうに、なにかいるのかな？

……猫とか？

それならまだいいけど……ま、まさか、オバケじゃないよね？

はじめての場所でひとりぼつちだからか、変な想像をして、心細くなつてしまう。

わたしは、ビクビクしながら息を殺して耳をすませてみる。すると——

「おい、おまえ。あんまり音立てるなよ！ 鬼に見つかつちゃうだろ」
人の声だ。

なんだ……よかつた。とりあえず、オバケじゃないみたい。

「おれじゃないよ！ それよりなんか、へんなにおいしくないか？」

「おい？」

ドキリとした。

冷や汗が背中をつーつと伝い落ちていく。

「おれたちとはなんかちがう……そうだ！　これ、ニンゲンのにおいだ」
ドキッ！

「はあ？　バカ。こんなところにニンゲンがいるわけ……」

姿の見える人たちの会話に恐ろしくなつて、わたしは反射的に立ち上がる。

でも、気づかないうちに手に力が入っていたらしく、地図がクシャツと乾いた音を立てた。

やつちやつた、と思つたときにはもう遅い。

「ヤバッ、鬼が来た!?　逃げろ！」

「おい、バカッ！」

わたしが出した音におどろいたらしい声の主が、ぴよんと草むらから飛び出してくる。

「きやつ……！」

「うわあッ！」

思つたよりすぐ近くにいたらしく、わたしは、突然飛び出してきた人影をとつさに避けきれず、ぶつかつてしまった。

その場に尻もちをつく。

いたた……

腰に手を当てて起き上がりながら、ぶつかつたなにかを見る。

草むらの陰から現れたのは、ふわふわのケモ耳やしつぽを生やした獣人の男の子ふたりだった。

クマのような丸い耳としつぽの子と、背中にワシのような大きなつばさを持った子だ。

「つて、あれ？　鬼じゃなくて……女の子？」

小さく悲鳴を上げたわたしを見て、男の子たちがきよんとする。

「君、だれ？　種族は？」

「しゅ、種族？」

「なに科？」

「な、なにつて言われても……」

ドギマギしていると、男の子たちが怪訝そうな顔をした。

「あれ？　でもこの子、頭に耳がないよ」

「本当だ。つばさもないし」

男の子たちは、不思議そうに首をかしげながら顔を見合わせていた。

「……ちょっと待って。このにおいつて」

クマっぽい容姿の男の子が不意に、くん、と鼻を動かした。

「……やっぱり」

「君、ニンゲンだよね!」

さっそく、バレた!?

ふたりとも、なんだか視線がギラギラしてて怖いんだけどっ!

どうしよう。こうなったら……

わたしは一步あらずさる。

「あ、あの……ごめんなさいっ!」

男の子たちの迫力に負けて、わたしは反射的に謝ってから、ダダッと逃げ出した。

「あつ、ちよつと待ってよ!」

「おっ! なになに? 鬼ごっこ、君も交ざる?」

「鬼ごっこなら負けないよ!」

振り返ると、ものすごい勢いで走ってくる男の子たちの姿が。

ウソっ、追いかけてくる!?

男の子たちから必死に逃げるけれど、相手は獣人。

足の速さで敵うわけがなかった。

「つーかまーえたっ!」

あつというまに追いつかれて、男の子に腕をつかまれた。

「きやあつ!」

びつくりして、思わず叫んでしまう。

だって! 出会ったばかりの知らない男の子に突然追いかけて、しかもいきなり腕

をつかまれたら、声だつて出ちゃうよ!

けれど、わたしの体力はすでに尽きていて、逃げたくても逃げられない。

わたしは息を切らしながら、膝に手をついた。

「もう、いきなり逃げるなんてヒドイじゃん」

「うんうん。突然逃げるから、つい反射で追いかけてやったよね」

「うんうん。突然逃げるから、つい反射で追いかけてやったよね」

「その……ごめんなさい。ちよつとびつくりしちゃって……」

「君、名前なんていうの?」

「君、名前なんていうの?」

「君、名前なんていうの?」

「何年生？」

「えつと……」

獣人の男の子たちは、戸惑うわたしにかまわず、興味津々に話しかけてくる。答えようにも、質問が矢継ぎ早すぎて……！

「ねえってば！」と、声をかけてきた男の子の手が、再びこちらへ伸びた。またつかまれる！

そう思い、恐怖でぎゅつと目をつむったその瞬間だった。

「おい」

突然、広場に低く落ち着いた声が響いた。

「おまえら、それ以上その子に手を出すなよ」
次の瞬間、ぐいつと手首を引かれて――

「わっ!？」

ふわりと両足が宙に浮き、身体があたたかいぬくもりに包まれる。

も、もしかしてこれって、お姫さま抱っこ!？

おどろいて顔を上げると、ハッと息をのむほどきれいな顔をした男の子と目が合った。



金色のさらさらした髪は、太陽の光を吸い込んだみたいにきらめいている。
頭の上についている耳は、ライオンみたいにまるつと大きくて、腰からはすらりとした
長いしっぽも見えた。

うわあ、かつこいい子……！

耳としっぽがあるということは、この子も獣人さんなんだよね！

男の子はわたしを見下ろすと、ふつと微笑んだ。

「遅くなってごめんね。大丈夫だった？」

向けられた言葉とまなざしは、陽だまりみたいにあたたかくて、ついみとれてしまう。

ふいに男の子がぱちりとまばたきをした。

ハッと我に返る。

「あつ……えつと」

わたしはドキドキしながらも、うん、となんとかうなずいてみせる。

……不思議。

この子もあの子たちと同じ獣人さんのはずなのに、すぐく落ち着いて……恐怖な
て、ぜんぜん感じない。

それにしても、この子……まるで、おとき話に出てくる王子さまみたい。

「あの……あなたはだれ？」

「おれはコハク。君のガーディアンだよ」

「ガーディアン？」

ガーディアンって、なんだろう？

わたしは首をかしげる。

「本当は校門の前まで君を迎えに行く予定だったんだけど、途中で中等部の先輩たちに絡
まれちゃって」

コハクくんが申し訳なさそうに言う。

「校門の前？」

その言葉にハツとした。

「……もしかして、あなたがバス停までわたしをお迎えに来てくれる予定だった人？」

たずねると、コハクくんはうなずいた。

「そうだよ。なんとかギリギリ間に合ったと思ったたら、バスも君の姿もないからあせつた
よ。でも、見つけられてよかった」

そう言つて、コハクくんはにこりと微笑んだ。

コハクくん、急いで来てくれたんだ。

それなのに勝手に移動して、悪いことしちゃったな。

「あの、勝手に動いてごめんさい。迎えに来てくれてありがとう」

照れながらお礼を言つと、コハクくんは「いいんだよ」とやさしい声音で言つてくれた。続けて、「ニンゲンの君にとってこの学園は、危険がいっぱいだもんね」とも。

「……え？」

この学園が、わたしにとつて危険？

「あの、それつてどういうこと？」

疑問に思つてたずねると、コハクくんがぎよんとした顔をする。

あれ。わたし、へんなこと言つたかな？

少し不安になつていると、コハクくんが言つた。

「どういふこともなにもないよ。肉食動物のなかにニンゲンがひとりだけなんて、どう考えても危ないだろ？」

「えつと……でも、獣人さんつてみんなエリートなんだし、危険なんてないんじゃない？」

コハクくんの言うとおり、たしかに獣人さんは肉食動物の遺伝子を持つている。

でも、獣人国の人々がだれかに危害を加えたなんてニュースは、これまで一度も見えない。

獣人さんが危ないなんて認識は、わたしはおろか、日本人のだれもがしていないはず

だと思ふのだけだ。

すると、コハクくんは苦笑した。

「君、なにか勘違いしてない？ 日本にいる獣人はたしかにみんなエリートだけど、この国にいる獣人はぜんぜんそんなヒトばかりじゃないよ？」

「えつ？」

ど、どういうこと？

「ふつうの獣人は好奇心が旺盛で、ニンゲンに対してもじぶんたちの感覚で接がちなんだ。だから日本に行くためのパスポート取得はそう簡単なことじゃない。そういう経緯があるから、日本にいる獣人は少ないんだよ」

「そ、そうなの!？」

日本に獣人さんが少なく、エリートと呼ばれている理由が、今ようやく分かった。

獣人さんがみんなエリートなんじゃなくて、日本にはエリートの獣人さんしか来ることができないからなんだ……！

レイコさんの話がよみかえる。

『サファリ学園は、主に獣人が日本に来るための資格や基礎知識を得るための全寮制の学園です』

『ニンゲンと共存生活を送る練習のため、各学年に一名、日本からニンゲンの生徒を迎えるんです』

顔から血の気がサーツと引いていく感じがした。

も、もしかしてわたし、けつこうヤバイところに来ちゃったんじゃない？……！？

「君、顔色悪いけど大丈夫？」

コハクくんが心配そうにわたしの顔をのぞきこむ。

「もしかして、ここって危険な場所なのかな？」

サファリ学園が日本の中学校より危険かもしれないなんて、想像もしていなかった。

「そんな顔しなくても大丈夫だよ。君のことはおれが必ず守るから」

「でも……」

「こつちの世界でニンゲンはめずらしいから、みんな興味津々なだけ。この学園に通っている子は、そもそもがニンゲン好きな子ばかりだし。基本的にはいいヤツらだから安心して」

そうなのかなあ。

それでもなお不安でうつむいていると、コハクくんがわたしを抱きかかえる手に力を込めた。

顔を上げると、コハクくんは、向かい合っていた男の子たちをにらんでいた。

「いいか、おまえら」

コハクくんが、まるで威嚇するような低い声を出す。

わっ……！ ドキッと胸が鳴る。

コハクくんのまなざし、さっきまでわたしに向けていた視線とぜんぜんちがう。

すごい迫力……！

「これ以上この子をおびえさせたら、容赦しないからな」

ぴしっと言いつ切るその姿に、わたしをとり囲んでいた男子たちが身を低くしながらあわずさる。

「……なんだよ、ちよつと話しかけたくらいで大袈裟だな。横入りしてきたのはおまえのほうのくせに」

「なんだと？」

「ひっ！」

「な、なんでもないですうつ」

男の子たちが、コハクくんの迫力に一目散に逃げていく。
助かった……！

つて、ちよつと待つて。

ほつとした瞬間、我に返る。

そういえばわたし、コハクくんにお姫さま抱っこされたままだった！

「あの、お、おろして……！ もう、大丈夫だからっ！」

慌て言うと、コハクくんが首を振った。

「大丈夫そうには見えないよ。ほら、まだこんなにふるえてるし」

「ううつ、それは」

たしかに、さつきは怖くて声も出せなかった。

足もまだ、ちよつとがくがくしてる。

でも、だからといってずつとこのままなんて恥ずかしすぎる……！

腕のなかで小さくなるわたしを見て、コハクくんは小さく笑う。

「ごめんごめん。冗談だつて。今おろすよ」

コハクくんは、わたしをそつと地面におろしてくれた。

「ありがとう」

お礼を言うと、コハクくんがにこつと笑った。

「改めて、おれはライオンの獣人のコハク。君の名前は？」

「わ、わたしは、弓屋メイ……です」

おずおずと名乗ると、コハクくんはやさしげに目を細めた。

「メイ。これからよろしくね」

コハクくんの目はきりつとしているのどこかやさしく、あたたかい光をたたえている。
また、胸がどくと鳴った。

「……うん。こちらこそ」

「さて。それじゃ今から寮に案内するよ」

コハクくんはそう言^いって、さりげなくわたしのキャリアケースを持^もつてくれる。
少し歩^{ある}いてから、コハクくんが振り返^{かえ}った。

「ついてきて、メイ」

「あつ、う、うん！」

わたしは、急^{いそ}いでコハクくんのあとを追^おいかけた。

第三章 ^{だいさんしょう} サファリ寮 ^{りょう}

コハクくんに連^つれられて、わたしはさつそく寮^{りょう}へと向^むかった。
美^{うつく}しく整^{ととの}えられた中庭^{なかにわ}を抜^ぬけると、石造^{いしづく}りの建^{たて}物^{もの}が見^みえてきた。
ステンドグラスのアーチ窓^{まど}に、屋根^{やね}部分^{ぶぶん}には大^{おお}きな塔^{とう}まである。
まるで、異^い国^{こく}のお姫^{ひめ}さまが住^すんでいそうな外^{がい}観^{かん}だ。

「かわいい！」

すぐくわくするけど、ひとつだけ気^きになることがあつた。

「あの、ここ、パンフレットで見^みた寮^{りょう}とちがう気がするんだけど……」

そう。わたしがレイコさんにもらったパンフレットには、もつとマンションのような大^{おお}きな建^{たて}物^{もの}が載^のっていた。

たずねると、コハクくんは「ああ」とうなずいた。

「ここは中等部^{ちゅうぶ}一年生^{いちねんせい}のガーディアンと特待生^{とくたいせい}だけが住^すめる特別^{とくべつ}な寮^{りょう}だからね。パンフ

レットには、大体の生徒が入る一般寮しか載ってないんだよ」

「ここは、わたしとガーディアンだけ？」

「そういえば、コハクくんはさつきも『ガーディアン』って言った。」

「……あの、コハクくん。今さらなんだけど、ガーディアンっていったいなんなの？」

「ガーディアンは、特待生を守るボディーガードみたいな生徒たちのことだよ」

「ボディーガード？」

よく分からないけど、コハクくんがわたしのボディーガードで、コハクくん以外にも、わたしのボディーガードをしてくれる子が何人かいるということなのかな。

コハクくんが続いて、わたしも寮に入る。

観音開きの大きな扉のなかに入ると、まるで舞踏会の会場みたいに広いホールが現れた。頭上には豪華なシャンデリアがあり、床のタイルに小さな星をきらきらとまき散らしている。

「いらつしやい、あなたがメイさんね」

奥から現れたのは、白いふわふわの耳と、同じ色のしつぽを持つ女性。

するどい目元だけど、表情はお母さんみたいにとってもやさしい。

「わたしはホッキョクギツネの獣人。名前はヨウコっていうの。この寮の寮母をしていて、

みんなからは『ヨウコさん』って呼ばれてるわ。よろしくね、メイさん」

「弓屋メイです。よろしくお願いします！」

あいさつして頭を下げると、ヨウコさんはクスクスと笑った。

「そんなに緊張しなくても大丈夫よ。ここでは、わたしのことをお母さんだと思って、なんでも言うてね」

「ありがとうございます」

ヨウコさんのやさしげな笑顔に、胸の奥がちよこつとだけほっこりした。

よかった。ヨウコさん、とってもやさしそう！

「メイさん。長旅で疲れたでしょう？ よければいったん、ラウンジでお茶にしましょう。メイさんには、話しておきたいことがいろいろあるの」

「はい……！」

そうして案内されたラウンジは、まるで高級ホテルみたいだった。

壁一面が大きな本棚になっていて、ソファはふわふわ。

丸いテーブルの上にはハーブティーとクッキーが置いてある。

ハーブティーが、空間にとつてもいい香りをただよわせていた。

ヨウコさんと向かい合うかたちでソファに座ると、わたしはしやんと姿勢を正した。

「さてと。まずはどこから話そうかしらねえ」とヨウコさんが考えこむ。すると、コハクくんが言った。

「さつき、ガーディアンの話はしておいたよ」

ヨウコさんがふんわりと微笑む。

「あら、ありがとう。それじゃ、わたしからは獣人にとつてニンゲンがどれだけ特別かを教えましょう」

「人間が……特別？」

わたしが首をかしげると、ヨウコさんはゆつくりとうなずいた。

「このサファリ学園は、ニンゲンとの共存の仕方を学ぶ場所ってことはメイさんも知ってるわよね？」

「はい。日本に来る獣人さんを養成するのがこの学園だつて聞きました」

ヨウコさんとコハクくんが同時にうなずく。

「そのとおりよ。でもね、それってすごく大変なことなの」

「どうしてですか？」

「肉食動物はね、ふとしたとき本能で動いてしまうことがあるの。だから、獣人が万が一にも日本でそうならないために、この学園では実際にニンゲンと生活して、ニンゲンの特性や思いやりを覚えるのよ。つまり、あなたはこの学園で、その学びの中心になる大切な存在なの」

わたしは、ゆらゆらと揺れるカップのなかのハーブティーを見つめた。

「あの、でもそれってつまり……わたしにとつてこの学園は危険ってことですよね」

ヨウコさんはわたしの言葉を否定しないまま目を伏せた。

「たしかに、メイさんにとつてこの場所は、ちよつとだけ危険かも。でも、だからガーディアンがいるのよ」

となりを見ると、コハクくんがやさしいまなざしでわたしを見つめていた。

「メイのことはおれがぜつたい守るから、安心して」

コハクくんの気持ちはすぐくうれしいけれど……本当に大丈夫なのかな。

「さて、今度はガーディアン制度について説明するわね」

ヨウコさんの話によると、サファリ学園の生徒は全員ランキング付けされていて、上位

五人だけがガーディアンと呼ばれ、特待生を守る任務を与えられるという。

ガーディアン制度の仕組みは分かった。けれど、疑問はまだある。

「あの……そもそもどうして、みんなガーディアンをを目指すんですか？」

「それはもちろん、ガーディアンになれば、日本に行くための『パスポート』が授与されるからよ」

パスポート！

それについては、すでにレイコさんから聞いていて知っている。

「これだよ」

コハクくんは、ポケットからあるものを取り出した。

まるっとした肉球に、爪の引っかかり傷みみたいなデザインがほどこされたオシャレなペンダントだ。

かわいい！ わたしが持っている手帳型の日本のパスポートとちがって、獣人国のパスポートはアクセサリー型のようだ。

「獣人国ではね、これを持っている獣人だけが、日本に行くことができるんだ」

「そっか。みんな、日本に行きたいから、ガーディアンを目指すんだね」

ヨウコさんがうなずく。

「そうなの。でも、パスポートをもらえるのは、中学最後の年度末ランキングの上位五人だけ」

「えっ？　じゃあ、コハクくんが今持つてるそれは？」

たずねると、コハクくんが答えてくれた。

「これは、学園保有のパスポート。つまり、今はまだ借りてるだけなんだ。これをじぶんのものにするには、卒業のときまでガーディアンでい続けるくらい、好成績でいなきやならないんだよ」

「そ、そんなに厳しいんだ」

「そうね。日本に憧れているこの学園の子どもたちはみんな、このパスポートが欲しくてサファリ学園に入学するんだけど、もらえずに卒業していく子のほうが、ずっと多いのよ」

中等部の全校生徒は、二百人ほど。その



うち、パスポートを授与されるのはガーディアンになったたつたの五人だけなんて。

「それでも、みんな一生懸命ガーディアンを目指してるんだよ」と、コハクくんが言う。

「どうして？」

わたしだったら、正直、じぶんなんかにはきつと無理だつてあきらめちゃうかもしれない。周りにも笑われちゃうかもしれないし。

「たしかに難しいことだけど、努力しなきゃ欲しいものは手に入らないだろ？」

「努力しなきゃ……か」

たしかにそのとおりだ。でも……

わたしはうつむく。

なんだか、思ってた特待生じゃなかったし、ほかにも知らないことだらけで、ちよつとだけシヨック。

でも。わたしが感じた気持ちは、それだけじゃなかった。

「メイ、もしかして特待生になるの、いやになっちゃった？」

コハクくんが不安そうにわたしの顔をのぞきこんでくる。わたしはゆつくりと顔をあげた。

「たしかに、ちよつとびっくりした」

コハクくんの言うとおり、実際今日一日で、わたしのなかにあつた獣人さんのイメージはかなり変わっちゃった。

これまで、獣人さんはなんでもできて、生まれながらにエリートなんだと思つてた。でも、ちがつた。

そのことが、わたしは――

「わたし、ちよつとだけ、うれしいかも」

「え？　うれしい？　それつてどういうこと？」

コハクくんが戸惑つた顔をする。

「わたしね、獣人さんつて、なんでもできる遠い存在なんだと思つてたんだ。でも、そんなことなくて……みんな努力してエリートになつてたんだね！」

コハクくんの表情が、うれしそうにパツと晴れていく。

「わたしも負けないようにがんばる！」

コハクくんやヨウコさんの話を聞いたわたしは、そう強く思つたんだ。

第四章 個性豊かなガーディアンたち

ラウンジでの説明がひととおり終わると、わたしは寮母のヨウコさんとコハクくん、共有スペースの案内をもらうことになった。

この寮は特待生のわたしとガーディアン専用の寮だから、一般寮より小きめだけど、仕様はかなり豪華。

テラスが備え付けられた中庭には色あざやかなバラが咲き乱れ、浴場は上品な香りが出よう。ヒノキ風呂。案内されるたび、思わず感動の声を上げてしまう。

今日からここで暮らせるなんて、夢みたいだ。

一階の案内が終わり、二階に続く吹き抜けのらせん階段を上がっていたときだった。頭上から、声が降ってきた。

「あれっ？　かわいい女の子はっけーん！」

見上げると、三人の男の子が階段を降りてくるところだった。

先頭をきつて降りてきたのは、黒髪にはちみつ色のメッシュが入ってる男の子。

はちみつ色の耳についた大きめのリングピアスと、八重歯が印象的な子だ。

男の子は、わたしの前まで跳ねるように軽やかに駆け降りてくると、笑顔で自己紹介をはじめた。

「おれ、チーターのレイ！　もしかして、君がおれのニンゲンちゃん？」

「えっ!？」

おれの？　って、きつとガーディアンとして守るって意味だね？

この寮に在るってことは、この子もコハクくんと同じガーディアンなんだろうし。

「……えっと、弓屋メイ、です」

わたしは小さく頭を下げた。

「へえ、メイっていうんだ！　ちっちゃくてかわいいな！」

そう言つて、鼻先までつんと近づいてくるレイくん。

わわっ！　ち、近い……!!

「よろしくな、メイ！」

「よ、よろしくお願ひします」